

ゴンチャロフ著『フレガット、バルラダ』

中の一節

日露交通史之節

汽車汽船に關する智識傳來史上之重要事件

嘉永七年(安政元年)甲寅正月の長崎

序 說

教 授 武 藤 長 藏

一

大正十一年三月發行本年報第二冊所載拙稿『鐵道に關する知識の我國に傳はりし門戸としての長崎』中にも引用した有名なる露國の文學者ゴンチャロフ(Ivan Alexandrovich Gontcharoff)著『フレガット、バルラダ』(“The Frigate Pallada”)に就て茲に重ねて紹介して見たい。其理由は、我國は鐵道に關する知識が傳來した歴史に關する露國側の材料が其内に存する事、先に拙稿『鐵道に關する知識の我國に傳はりし門戸としての長崎』中に論證した如くであるのみならず、日露交通(交渉)史之一節を窺ふべき露西亞側の材料と見る事が出来るからである。

二

露西亞使節水師提督ブーチャーチン (Admiral Poutiatine) は、ブーチャーローフを祕書として其乗組める蒸汽軍艦フレガット船「バルラーダー」號 (Frigate Pallada) の外に、三艘の艦船を率ゐて、嘉永六年 (癸丑) (西曆千八百五十三年) 七月十七日、長崎港に來た。右軍艦フレガット型バルラーダー號は、長崎に來た最初の蒸汽船であつた。八月十九日に、露國使節は長崎に上陸し、長崎西役所 (今の長崎縣廳の所在地) にて、長崎奉行大澤豐後守に會見し國書を幕府に奉呈せむ事を請ひ、長崎奉行は其國書を受取つた。

露國は、日本と和睦安穩を固定するの策として、第一に兩國の疆界を明定せんとし、第二に一定の港にて交易を許可し、食料其他の必要品を供給されむ事を申出でむとした事等は、前に拙稿『鐵道に關する知識の我國に傳はりし門戸としての長崎』中に述べ置いた通である。

而して幕府の勘定奉行川路左衛門尉聖謨は、筒井肥前守政憲と共に長崎に下り、露國使節ブーチャーチン (布恬廷) と應接すべき幕府の命を奉じて、嘉永六丑年 (西曆千八百五十三年) 十二月八日長崎奉行西役所にて露國使節と始めて會見した。

最後に、翌年 (甲寅) 正月四日に露艦を往訪した。其折に川路聖謨の外に、幕臣中村爲彌、其他の屬員も隨行したのであつたが、露國の使節ブーチャーチン其他露艦將卒は之を歡迎した

而して其夕餘興に汽車の雛形などを運轉したものと察せられる。

私は露西亞應接川路左衛門尉聖謨日記其他日本側の資料により前に拙稿『鐵道に關する知識の我國に傳はりし門戸としての長崎』中に其實を示して置いた。又、露國側の資料として、ゴンチャロフの著作「フレガット、バルラーダー」中の記事も引用して置いたが、今重ねて茲にゴンチャロフの著作中の記事を更に詳しく紹介したい。

三

先づ順序として、ゴンチャロフは如何なる人なる乎を略述する事とする。ゴンチャロフは千八百十二年（我文化九年）の頃に生れ、千八百九十一年（明治二十四年）に永眠した露國の有名な文學者で、露國文學史上ツルゲネーフ（Turgeneff）及びトルストイ（Tolstoy）に次ぐ位置を占むる人であると稱せられて居る。（P. Kropotkin 著 Russian Literature Ideals and Realities Chapter V. Gontcharoff の部參照）

（附註） Ivan Alexandrovich Gontcharoff は千八百十三年六月十八日に生れたと書いて居る書物がある、A Common Story, A Novel by Ivan Gontcharoff Translated from the Russian by Constance Garnett の Preface に記する處が即ち夫である。曰く

Ivan Alexandrovich Gontcharoff was born at Simbirsk, on the Volga, on the 18th of June, 1813.

又ゴンチャロフは千八百十四年に生れたと記する書物もある、即ち、K. Waliszewski 著露西亞文學史
ゴンチャロフ著『フレガット、バルラーダー』中の一節

(A History of Russian Literature) 第八章中 The Successors of Gogol を題する部分のはじめに次の如く書いてある。

Ivan Aleksandrovich Goncharov (1814—1891) published his first book, A Common Story (1847), under the Auspices of Briĭnski, who said of him, "He is a poet and an artist; nothing more."

シカシ私が参考した書物には、多く千八百十二年、又は千八百十二年頃と書いてあるから、私は千八百十二年頃と解するを穩當と考へ、本文に其説を採つた次第である。

ゴンチャロフは富裕な商家に生れ父は早く死んだので母の手により育てられた。彼は千八百三十一年にモスコウ大學に入つた。其在學中、當時の大學生仲間に流行した政治及び社會主義的運動に共鳴する事なく専心勉學した。彼は早くより佛語佛文學獨文學等の如き外國語文學に親しむた、(A. Eliasberg 著) (露西亞文學史參照) 大學にては主として言語學を專攻し文學以外に哲學も學んだ。

彼は千八百三十五年モスコウ大學の課程を終り Volga 河畔の郷里 Simbirsk 市に歸り、同縣知事の祕書となり、其後露國首府聖ペテルスブルグ (St. Petersburg) の大藏省翻譯官となり、千八百五十二年に露國水師提督ブーチャーチンの祕書として海外に遊ぶまで其職に在つた。

千八百五十二年(我嘉永五年)には水師提督ブーチャーチン (Admiral Putiatine) の祕書として露艦フレガット型バルラーダー號に乗り、西曆千八百五十三年八月(我嘉永六年七月十八日)長崎に來た。

(附註) 川路長崎日記中にゴンチャロフを評して『此人無官なれどもセクレタータスの事をなす。公用方取扱といふが如

し常に使節の脇に居て口出しをするもの也。謀主といふ體にみゆ」もあり

其航海旅行記を『フレガット、バルラーダー』と題して後年出版した。

(附註) 獨逸語に『Die Seereise auf der Pallada』又は『Fregate Pallas』を譯し英語に『The Frigate Pallas』

又は『The Frigate Pallada』を譯した例がある。

其旅行記の一部は大日本文明協會編輯『歐米人之日本觀』上編に『ゴンチャロフの日本紀行』と題して輯録されて居る。而してゴンチャロフ著『フレガット、バルラーダー』の露西亞原本は前の長崎駐在露國領事が所藏して居られたから、私は當時我校の露語教授であつた十時氏を煩はして汽車の摸型の事の書いてある部分を翻譯して貰ひ、其譯文は、前に拙稿『鐵道に關する智識の我國に傳はりし門戸としての長崎』中に引用して置いた。(本年報第二冊第二百五十二頁參照)。

其後私は或露人に托して原本を浦鹽より求めた。又ゴンチャロフの此旅行記を邦語に譯して未だ印刷出版の運びに至らざる原丈氏の翻譯原稿を文學士前田不二氏より拜見するの機會を得た。私は其翻譯原稿を通讀して非常に興味を感じた。何とか其一小部分でも印刷して世に紹介したいと思ふ。シカシ私は其翻譯の正確の程度を判斷する資格なきものであるから兎も角我校にて露語を教授さるる中村助教授に御願して原稿の通讀且つ批判を求め多少修正を施して原氏翻譯の一小部分ではあるが機關車の摸型や線路に關する記事のある部分よりはじめ嘉永七年

甲寅正月長崎を將に去らむとするまでの部分までの一節を茲に掲載する事とした。

ゴンチャロフの名著「フレガット・バルラーダー」に就ての批評としてはゴンチャロフの永眠した時に卓抜なる批評家 Michel Zagonlaieff が發表したゴンチャロフ著作批判中より『フレガット・バルラーダー』に關する一節を引用するを適當と考へる。即ち左の如くである。

He (Gontcharoff) participated in the diplomatic mission of Admiral Poutiatine to Japan, he brought back from his voyage around the world nothing but picturesque memorials, in which we may vainly seek for the least trace of a serious interest in the somewhat important political work to which he had been called, to contribute. His beautiful work, 'The Frigate Pallada' is of deep interest in this connection, and we are astonished at the slight notice which has been given to it by the posthumous appreciators of the great writer.

(Ivan Gontcharoff 著 Constance Garnett 英譯 A Common Story の序文 Preface 中) Michel Zagonlaieff 所論の一節を英譯してあるからこれを茲に引用したのである)

× × × × × ×

原氏の翻譯文中に出で來る人名中註釋を要すべしと思はるるもの次の如し。

(1) 中村とあるは幕臣(勘定組頭)中村爲彌を指し佐賀藩精煉方に召抱られて居た京都の人中村

奇輔ではない。

(2) 古兵衛とあるは長崎人大通詞西吉兵衛

(3) 榮之助とあるは同じく長崎人阿蘭陀大通詞森山榮之助

(4) 筒井とあるは筒井肥前守政憲

(5) 川路とあるは幕府の勘定奉行川路左衛門尉聖謨

(6) 奉行とあるは長崎奉行大澤豊後守を指す。

(序説終)

× × × × ×

ゴンチャロフ原著

原 丈 譯

私達が長崎に行くとき、毎日正午に私達に間食を出した。が三時頃にはバンケット（馳走）と云ふものを出した。つまり茶と菓子とである。私達も矢つ張り中村と彼の従者を皆馳走した。そこで彼等は私達のところへ喜んで來た。奉行のところの役人はもう顔を出さなかつた。なぜなら要件は既に全權と全權と共に來た所の役人として取り行はれたからである。殊に彼等は喜んで肉を喰ひ、シニョーフカ（櫻の實をブランデーにつけて製す）を飲んだ。彼等を色々に慰めてやつた。魔法ランプ

や、機關車等の模型や、線路を見せた。蒸氣を吐いて、機關車其ものゝ意志でどんなに疾走をするかを、彼等は口をぽかんと開けて眺めた。彼等の爲めに小さなオルガンを鳴らした。しいには私達の本物の音樂を響かした。

水師提督は中村に、彼が軍艦の第二の告別の宴に來る事を全權に乞ふやうに話して呉れと命じた。其のうちに彼等の新年がやつて來た。一月の新月から始まつた。それは一月の十七日だつた。水師提督は二人の年上の全權に二つの其訪問用の名刺とキシニョーフカや、リキユール酒や、牡牛の一部分やを入れて作つた贈り物を送つた。それから彼等に小さなオルガンや、繪や、アルバムの類を送つた。

私達の曆で一月二十日に、全權自身が又來る約束をした。そしてやつて來た。來て、彼等は云つた、軍艦に來るのは非常に満足である。彼等に茶を出し、その後で水師提督は要件に就て話をした。

午餐の前に彼等に又大砲を置いた甲板の動搖を見せた。して彼等は其の爲めに氣を失つたやうに思はれた。實際慣れない人間の爲めには苦痛らしく思はれる。其時不意に四百人の人間が太鼓の合圖によつて、大砲の方に走り出した。其の爲めに滑つたり、突き飛ばしたりしなかつた。大砲を解緊して、移動せしめ、装藥して發射した。(雷管筒で、唯だ模擬的に。つまりビス

トンで）それから又舷側の方に引き寄せた。殆ど五アルシン（一間五尺七寸三分餘）ほどの大砲は、おもちゃのやうに走つた。大砲の騒音と人々の足音と、ビストンの打撃と發光と、乗組員の言葉——是は皆日本人の眼には惱ましくて時々見なかつた。私共の客には此樂しみは餘り氣に入らなかつたと云ふことは明かであつた。筒井老人は卒倒するほどびつくりしてしまつた。もつと早く中止するやうに命じた。前夜彼等は榮之助を送つて、丁度自分の爲めのやうに、新しい照準のある小銃と、數個の大砲のビストンを贈與するやうに乞ふた。が實際は、勿論江戸からの命令によつたものである。然し水師提督は、かう云ふ物は不斷の交際があり、最も友誼的である者にのみ與へることが出来るのだと注意して拒絶した。騒ぎの後で、帆の操練を見せた。數分間に帆を開いたり、片付けたりした。

それから食卓に就いた。がもう以前のやうにはなく、ヨーロッパ風に、皆一緒に、つまり四人の全權が皆と、それから爲彌、更に私達七人。他の者の爲めには士官公室に食卓が準備されてあつた。吉兵衛と榮之助は又、年上の二人の全權の足の近くの床の上に坐つた。全部の皿をヨーロッパ式に出した。私は皿の取扱方に就いて川路に助力した。がベート君は筒井に。川路は皆選擇して喰つた。おの／＼の皿に就て尋ねた。が老人は噛み碎いてゐた。無意識には、彼には何も出せないやうに考へられた。第一回の時よりも彼等は好んで非常に飲んだ。私達の

ところで健康の爲めに乾杯するのを習つて絶えず酒を私達にも、自分にも注いだ。私達はちよつと飲み干したけれど、彼等は氣持よく其都度全部の盃を飲み干した。

午餐中に川路は少しそは／＼し出した。老人は何でもなかつた。シャンパン酒を出した。コルクが飛び出して酒が向ふに迸り出た時に、彼等は眼を大きくした。榮之助は經驗のある人間のやうに、此酒の特性を急いで説明した。水師提督は乾杯の言葉を述べた。「私達の要件の幸はせな進轉の爲めに！」と。川路は、シャンパンのコップで果物を浸した酒を三杯飲んだ後で、頭を食卓の上に置いた。そんな風にちよつとの間ためらつて、それから眼から眠を振り落した如く酔を振り落して、素早く聞いた。

「自分のところで最終に、水師提督とあなた方をいつ御馳走したらよいでせうかね？」

「都合のよい時にです。唯それは餘り心配しないが好いです」と彼に答へた。

然し彼は日を定めて呉れど乞ふた。其時水師提督は二日過ぎてからと定めた。川路は、其の期日迄には水師提督に依つて要求された、最後の文書を用意しやうと云ひ足した。川路は尙ほ繰返した。

「左様なら、いつお目にかゝられませうな？」

私達は意見を吐露しないのだらうか、長崎からどこへ行くのだらうかと、川路は期待した。

つまりロシヤには歸らないのだらうかと云ふのである。榮之助は一度水師提督の船室の食卓を計つて見た。

「何の爲めです？」

彼に聞いた。

「あなた方をまた御馳走する時には、こんな風にしたいのです」

彼は答へた。私達は此機會に私達の意向を現はさないのだらうかと、彼は思つたのだ。然し彼等には何も云はなかつた。唯だ「左様なら」と言つただけだ、けれども、どこにか、いつとかは——一と言も言はなかつた。

是れは彼等を恐怖させた。それは、さあ、どうして江戸に來るだらうかと云ふ事である。其時は全權の有らゆる骨折は消滅してしまふのだ。と云ふのは長崎に彼等の來た事は無駄になるからだ。彼等には私達を江戸に來させたくなかつた。殊に私達が亞米利加人と協約しないやうにと云ふ其爲めに。けれども、直ぐに貿易を開かうとはしなかつた。して、或は、何か好い事を一つも協議しなかつた。君達は、日本人が亞米利加人の爲めに、日本人が三つの港を開港した事を、新聞で知つてゐるだらう。今後は日本は自分自身で、條約無しに鎖國を止めなければならぬ事を水師提督は想像した。捕鯨者は港に行く機會を失はなかつたが、日本人はますます

す、貿易に類似したものは何でも許す事を欲しなかつた。少なくとも、今は此問題を自分のうちで決めもせず、熟考もせず、薪や食料やに對する代價や、水運搬賃等のことを聞くことをも欲せぬ間は。が殊に彼等は（捕鯨者）の爲めには薪は重要であつたから、捕鯨者はそれ（薪）をも欲してゐるのだ。彼等が鯨を捕獲し、大海の上で其脂肪を溶かすことは知れ切つてゐる事だ。今や無數の捕鯨者は航海してゐる。彼等は日本の港では貿易をしないのを、どんな風に認知するだらう。港は、船が食料や、水を取りに、ちよつと寄港出来る其爲めにのみ開港されてゐるのだ。けれどもそれは早過ぎるのだらうか？日本人は、商品を積みおろしたり、海岸に降りる事を妨げやうとしてゐる。一度ならず、争ひや、恐らくは最初から個人的の争闘も惹起するだらう。して其處では是は何の爲めに皆行はれるかは、知れ切つてゐる事だ。

午餐後に私は川路の手からちよつとの間扇子を取つて見た。單純な、棕櫚のやうな木に、紙が張り廻してあつた。私は彼に返さうとしたが、自分が持つてゐるやうに手眞似で乞ふた。「記念に」と榮之助は彼の言葉を通譯した。私は感謝した。けれども貰ひ放しにする事は好まなかつたから、自分の時計の金鎖のねちを抜いて彼にやつた。彼はちよつとの間ためらつたが、彼に通譯さして、私の挨拶を聞いて、私の贈り物を受取つて、有難うと言つた。それから食卓から離れて何か榮之助は呟いた。それはかう云ふ事だつた。川路と筒井が私とベート君に煙管を入

れた箱を二つ宛贈り物として用意した。私から金鎖を受取つて、彼の贈り物が甚だつまらぬものである事を多分彼は氣が付いたのであらう。吉兵衛は、此事を何も知らなかつたので、午餐の後に私の傍らをくるく廻つて、笑つたり、溜息をしたりして息を切らして居た。彼は一度私と二回ほど話を始めた。してどうく我慢出来なくなつて、三回目に私がオランダ語を知らないから駄目だと言ひまくつた。

「筒井様と川路様は、あなたとベートさんが贈り物を受取るやうに乞ふてゐるのです……」榮之助は彼に終りまでしやべらせないで食堂に連れて行つた。煙管を皆ベート君にやつたら、同君は、私に感謝して、二つ分の贈り物を受取つた。

翌日川路は私に絹織物三反と銅製の吸口と煙管の附いた四本の棕櫚製バイブを送つて來た。銅は金の如く光つて居た。實際日本の銅には金分が多く含まれて居る。私は筒井に銀製金鍍金の匙を贈與した。我國の田舎風の匙で黒金象眼をした匙だ。そうして彼が匙で喰ふ様に慣れ、自分の子供をも教へ込み、屢々ロシア人と食事を共にする様に願ふた。彼は返禮として私に二個の小箱を送つて來た。一個は眞珠から造られた、象眼のある漆塗りのもので、他の一個は鮫の皮で張り廻されたる木製の小形の戸棚であつた。それで日本人は道中食物を運ぶのである。これは非常に珍妙なる品物である。私がホルテ、マンネーを贈與した處の第三の全權は私に煙草

入の袋半打と小刀用の靶(柄)半打を返禮として寄越した。日本人は色々の象眼を刀に施す、特に小刀に。私に贈與せられた鋼鐵の柄は立派なものであつた。花鳥の模様がついて日本の銘がついて居た。中村は私に筆と墨を添へて銅製の日本のインキ壺を送つて來た。水師提督に送附せられた贈物は甲板中、船室中に充滿した。品物其物は餘り嵩張るものではなかつた。各物品の爲めに箱が造られた。几帳面に造る時は一世紀もかゝりそうであつた。多くの贈物は非常に顯著なるものであつた。或る物は優美高雅であり、他の物は我國に於ては稀に見る所のものであつた。陶製の花瓶や、茶器は立派であり、漆塗の器物は尙更に立派である。小さな机や、小さな戸棚や飾棚や澤山な屏風などさへ送つて來た。それから完全な日本服裝の人形や、短刀や、短刀の裝飾品や其他色々のものさへ送つて來た。尙醬油も送つて來た。これは單に罰の様なものに過ぎなかつた。役人中の一人は醬油十五樽も贈物として寄越した。酒や、何だか乾した魚や、魚卵などを送つて來た。奉行はまた野菜を送つて來た。これは凡て告別の爲めにである。

午餐がすんで水師提督は川路に金時計を贈つた。

「鎖はですね、それは今あなたに上げましたね」

彼は言ひ足した。川路は有頂天になつた。彼は尙ほ會議中にもまるでかう云ふ贈り物を頻り

に乞ふやうに更に自分の厚い不細工の銀時計を見せた。私達の國ではかう云ふものは今では田舎の寺男のどこでさへも見出す事は出来ない。筒井には、矢つ張り、金の少し小さい時計と絹織物を二反贈つた。他の二人には一反づゝ贈つた。

彼等は八時に立去つた。彼等がやつと軍艦から十サージェン程離れるや否や突然凡ての桁の端に初めは火花が見え、次で火が燃え上つた。弱々しいうちに、思ひもかけず其後で全軍艦が丁度火がついたやうになつた。してあたりに遠くベンガル灣の燈火のやうに幻想的な空焼け(火の爲めに)で輝かされた。甲板では針を見るとが出来た——そんなに明るく軍艦と、遠かりつゝありし日本の舟は空焼けを浴びた、そして尙空焼は益々明るく水中に反射した。是は効果があつた。翌日日本人のところで、此事に就いて會議があつただけだつた。彼等は、どう云ふものか何であるか、何でやつたのかと質問した。是れはどうして作られるのか、見せて呉れと乞ふた。

土曜日には私達は彼等のところへ行つた。日はやゝ好かつた。それにも拘らず、部屋の中は暗く湿つぽく寒かつた。午餐までに挨拶やら、友情を現はす事やらで時間は経つてしまつた。して奉行とも和約した。水師提督は彼に言つた。たとへ私達と彼等との關係は全く快くなくなつたとしても、海岸の場所を配置する事に關しては、奉行は其上役の意志がなければ何も出来ない事を彼は理解してゐる。それだから彼等に反對する何ものも全く持つてゐない。それどころ

か、食料や、水の類を手に入れるのに或恵みをして呉れた爲めに彼等に感謝する。が若し上役がたとへ外國人とかう云ふ關係になるのを企てられたとしても、若しも有らゆる貴い國民に輕蔑を感じさせるところの是れ等のすべての苦痛を取消すに就ては彼は唯だ上役に上申して貰ひたいと彼等に乞ふた。奉行は答へた。彼は其事に就ては自分の上役に知らせる、が時として食物は不足してゐる原因の爲めに、要求されただけ全く送れなかつた。其事だけは許して貰いたいと水師提督に乞ふた。奉行には絹織物を一反づゝ贈つた。何であるかまだ知らぬうちに彼等は返禮をした。中に何が這入つて居るか調べて見ることもいやになつた程そんなに澤山箱を運んで來た。

全權のところの告別の宴は充分で、結構だつた。藥味と醬油で味をつけた葱の吸い物は非常にうまかつた。其中には肉球が浮んでゐた。唯だ何でこしらへたのか分らなかつた。私は又喜んで壓搾した赤い魚の卵と。醬油とをかけた魚をちよつと喰つた。熱い飯は二杯をそつくり喰つた。中村は私達に眞似て、絶えず私達皆のところへ寄つて來て熱心に馳走した。

「もつと何か喰べませんか？」

主人公達は聞いた。

「いや、何も欲しくありません。有難う。」

「若しかしたら、飯か、酒は一杯如何です？」

「いや、いや、私共は充分です。」

「さあ、熱い湯は飲みませんか？」

老人は愛想よく聞いた。私達はそれを辭退した。

「それちや、取片けても宜しいでせうね？」

「どうぞさうして下さい。」

午餐の後に「馳走」を出した。青い陶器の廣い皿の上には、菓子是非常にびかくしてゐたが此處のは黄色や、赤やの米の粉を振りかけたものではなかつた！が矢つ張り喰ふ事が出来なかつた。皿と一緒に是れを皆包んで私達の所に寄越した。だからフアドデューフには祝日だ！それから私達の皆の前に臺を置いた。其上には織物と、尙ほ將軍からの贈り物が横はつてゐた。織物は麻のと、絹のと、木綿のどのやうに思はれた。士官全部には殆ど透き通るやうな陶器の、薄い、一ダースの茶碗の這入つてゐる箱を持つて來た——矢張り日本の將軍の名に依つて。織物は贈り物として最上のものに考へるやうに思はれた。然しそれを此の薄い、殆んど透明な獨創の茶碗と交換出来るのを喜んだ。

全權は又私達がどこへ行くかを知らうと試みた。殊にオホツク海に行くのではないかと。つ

まりペテルブルグに行く事を意味するものではないか。

「今、今の處では支那へですね」彼等に話した「オホツク海にはですね——氷がありますから其處へは行けません」と

此祕密を好む性格は、彼に氣に入つてゐない事は明瞭だつた。川路は空しく目を瞬いたり、唇を嚙んだりした。微笑して彼を見た。若し私達が江戸へ行かうとしたら、彼はどんなに慘めだつたらう——。

けれども水師提督は徒らに彼等を恐怖させて置くのを好まなかつた。彼は、私達は春が過ぎてゐなければ歸らないと云ふ事を、彼等に告げるのを豫想したが、彼等が反駁しないやうに、去る時に是れを話したかつたのだ。其爲めに、私達が、既に錨を揚げた時に、此事に就て彼に告げてやつた。告別の時に、筒井と奉行等はまだ送り盡せなかつた贈り物を贈つて來た。筒井は無數の箱を水師提督と、ペート君と、艦長と私に、奉行は——皆の爲めに、家畜と野菜を。

順風で、天氣は静かだつた。私達にはもうほかの船と一緒に航海する必要はなかつた。水師提督は琉球島に行くやうに命じて、それらを解放した。して私達は全部の帆を張つて、一月の二十四日に、廣い自由などころの南方に向つて乗出した。スクーナー型の船は尙それより以前にヨーロッパや支那では何事が起つてゐるか其の報知を得る爲めに上海に出帆した。それには

矢つ張り琉球に行く事を命じた。スクーナー型船は君達からの手紙を持つて來ないだらうか？
私は何となくあきらめてゐるのだ。マニラ！マニラ！是れは私達の幻想であり、私達のパレス
ティン（聖地）である。其處へは私達の緊張した希望が突進して行く。是れは矢つ張り聖帶や被
布をつけた修道士や、ヅエーニヤや（スペイン皇_{后の侍女長}）や、闘牛のあるスペインだ。けれども尙ほ、つ
け加へると、熱帶の西班牙だ！（終り）